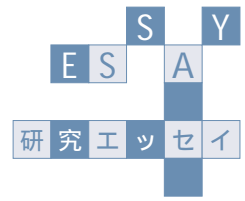




非文字資料としての日本語を考える

音訓、当て字、語源



山口 建治 (神奈川大学大学院外国語学研究科・教授)

長いあいだ中国語を教えることを仕事にしてきたせい
か、最近、どうも日本語と中国語の対応関係がいちいち
気になって仕方がない。漢字は一字だけでも単語として
機能するので表語文字であると言われる。漢字の意味に
対応する和語が固定化して和訓(単に訓ともいう)が成
立する。その訓と対立する音すなわち日本漢字音は、漢
字の原音が日本語の音韻体系のなかに反映したもの、つ
まりは日本語なまりの漢字音である。漢和辞典では音と
訓が併記されるため、音は中国伝来だが訓のほうは何と
なく日本にもともとある固有のことばであろうと思ひこ
みがちだ。ところが菊(キク、きく)肉(ニク、にく)の
ように音訓の区別がない場合や、銭(セン、ぜに)筆(ヒ
ツ、ふで)竹(チク、たけ)のように音と訓の音型がき
わめて近似している場合は(日本語中国語双方の音韻の
史的变化、および原音の-n、-m、-ng、-p、-t、-kの子
音韻尾のうしろに余計な母音がつけ加わるなどの音韻対
応のせを勘案する必要があるが)訓自体も実は漢字音
が和語化している可能性が非常に高い。ぜにとセン、ふ
でとヒツの違いはそのことばが入ってきたタイムラグに
基づくと考えられるのだ。

訓はすべて和語というわけではないことに気づいてか
ら、一見いかにも和語のように見えることばの中に、漢
語に由来することばが潜んでいるように思われはじめ、
日本語の語源問題に首を突っ込むことになった。そうい
う眼で日本語のことばを改めて見直してみると、漢語に
由来することばが思いのほか多くありそうなのに気づい
た。この数年はおに(鬼)ということばの語源探しに夢
中になってしまった。その間、文字通り鬼にとりつかれ
たのか大病を患った。今はその病は癒えたが、語源探
し癖はなお直っていない。くぐつ(傀儡)ということばの
語源問題にとりつかれている。そのことは別の機会に譲
るとして、ここでは表語文字の漢字を用いて表記するし
か方法がなかった、わが古代日本語の特殊な事情につ
いて書いてみたい。

具体的な問題をとりあげる前に最初から考え直してみ

よう。日本の列島にまだ漢字が伝わる以前、無文字時代
が長いあいだ続いた。漢字が伝わると和語は漢字の音と
訓を利用して表記されるようになった。日本語は漢字の
存在を抜きにしては語れないほど密接な関係を持って形
成されている。それを「腐れ縁」とか「不可避の他者」と
称す人がいる。川田順造先生も近著で、「やまとことばと
漢字のもつれ合い」の問題を興味深くとりあげておられ
る。日本語は非文字の音声言語であるときでも漢字まみ
れになっている。ことばを聞いてもその漢字が想起でき
ないと正確な意味が分からない。耳慣れないことばを聞
くと、ともかく漢字を当ててみようとする、当て字の習
性がわれわれにはある。

小学館の『日本大百科全書』によると、当て字とは、
「日本語を表記する際に、その語と意味のうえで直接関
係のない漢字の和訓や字音を借用する用法、またはその
漢字をいう」とあり、「本来、漢字を用いて日本語を書き
表すには、『やま 山』『たに 谷』のように、意味上の
対応関係をもつ漢字を使うのが通常であるが、対応する
漢字がない場合に、便宜的にある漢字の音や訓を借りて
書き記し、さらに和語以外の外来語、外国語の表記にも
及んだ。これが『当て字』である」とある。

私たちにとって大変悩ましいことは、最初は単にその
音や訓を借りるだけにすぎない場合でも、のちには表意
機能に優れる漢字の特性を活かしその字義に基づく語源
的な解釈や説明を示そうとする意識が働くようになるこ
とだ。その結果、ことばとその表記に用いられる漢字と
の関係が、単に便宜的なものから次第に語源的に何らか
の関係があるかのような漢字表記に取り替えられたり、
こじつけの解釈がつけ加わったりするのが避けられない。

古事記のトコヨ(登許余)やタナバタ(多那婆多)が、
のちに「常世」「棚機」と表記されるようになる。トコヨ
を「常世」と書くのは、トコヨを「常世」の字義と関係
づけて理解しようとする意識が生じたからである。しか
しトコヨの語源はほんとうに「常世」の字義と関係する
のだろうか。同様に、タナバタは万葉集では「棚機」と

表記される場合があるところから、一般にはその字義と関係づけて理解されている。だがタナバタは「棚機」の字義と本当に関係することなのかと問われれば、誰でも答えに躊躇するであろう。ここでも便宜的恣意的に漢字が当てられていない保証はない。そもそもの語源が明らかでないかぎり、スポーツ新聞でおなじみの駄洒落とあまり変わりがない当て字であるかも知れないのだ。

問題をもっと分かり易くするために卑近な例をとりあげよう。男性用上着をセビロといい、ふつう「背広」と漢字で表記する。「背幅の広いゆったりした上衣だから」とか、「市民服の意のcivil clothesから」とか、「ロンドンの高級洋品店街Savile Row」に由来するからとか、その語源には諸説ある（山口佳紀編『語源辞典』）、背幅が広いところからその語ができたのなら字訓を利用した新造語であるし、外国語の名詞に漢字を当てたのなら当て字である。漢語、和語（字訓）当て字、語源の関係を整理して、図式化してみよう。（下図参照）

むかしの人が漢字を用いてある和語を表記した時、ただ単に音や訓を借りるだけであったか、それとも語源にもとづく漢字の用法であったかは、今となっては判別するのはたいへん難しい。漢字に習熟した私たちの祖先たちが、後になるほど字義を活かす用法に工夫をこらし、またそれに頼ってことばを解釈する性向が生まれたことは確かである。しかし、ことばと文字の本来的な関係から言えば、それはまったく逆立ちした発想であり、表記に用いられる漢字の字義に頼るだけの語源探索はたいへん危ういということだ。カタログ（型録）は型の目録だからそういうのだというのに等しい。

<隠>の字音から「おに」ということばが生まれたというのは疑わしい。<隠>はオニということばに平安時代の人々が当てた当て字なのだとはとまず考えてみる。また、タナバタを<棚機>の字義に依拠して、水辺に棚を張り出し聖女がそこで機を織りながら神の降臨を待つ「棚

機津女」の祭儀にちなむことばであるなどという解釈もにわかには信じこまない。ともかくタナバタということばの当て字だと考えてみる。じっさい万葉集には<棚幡>という表記もあり、タナバタのハタは<機>ではなく<幡>であるとする民俗宗教学者もいる。漢字の音にしる訓にしるどちらもただことばの音声を表すのに利用されているだけに過ぎないのではないが、単なる当て字ではないかと疑ってみるところから出発すべきだというのである。用いられている漢字の字義に安易に頼ってさまざまに憶測をたくましくする前に、ことばの音声的側面にこそ語源にかかわる重大な情報が潜んでいるかもしれないと考えてみるということだ。音声的側面が見過ごされるのに反比例して、字義に頼った駄洒落のような民間語源説が氾濫する。

中国語に「約定俗成」ということわざがある。習慣や物事の名称が長年の実践を通じて次第に広く社会に公認されることを指していることばである。音声言語はまさにそういうものである。誰かが決めればそれに従って皆がまねをするというのではない。自然に形成された音声言語こそが重要なのだ。ときには文字を脇に置いて、それによって表記されることばの音声の方に耳を傾ける態度が必要であろう。

農具の「くわ」はふつう「鍬」という字が当てられる。東アジアの農具の分布を詳しく調査分析されている河野通明先生にお聞きしたことがだが、「くわ」は「鏵」の字音に由来することばであろうとのことである。ことばと文字がねじれて入ったのである。それと同様に、「おに」は「瘟」の字音が和語化した、「うそ」は「胡説」の語音が和語化したというのが、私の説である。日本語は漢字まみれであるとはいえ、ことばの伝播にいつも漢字がべったりへばりついていたらと考えるのはやはり早計であり、とくに俗語のような場合には文字とのずれや勘違い誤解が生じたとしても異とするに足りないのである。

漢語	和語（字訓）	<当て字>	語源	
山	やま			
川	かわ			
鬼	おに	<隠>	?	
七夕	たなばた	<棚機>	?	
	とこよ	<常世>	?	
	セビロ	<背広>	civil / Savile / 背広	対応
	カタログ	<型録>	catalog	あいまいな対応